

## 児童発達支援ガイドラインに基づく自己評価（2021年度）

児童発達支援事業の支援の質の向上を図るため、「児童発達支援ガイドライン」に基づき2021年10～11月に実施した自己評価の結果を下記の通り公表します。（アンケート回収率：保護者 82%、スタッフ 80%）

## 1-1. 保護者アンケートの結果（まとめ）

	保護者アンケートからの読み取り	改善目標・工夫している点
環境・体制整備	活動環境、職員配置・専門性について、高い評価をいただきました。	基準上配置すべき人員以上の職員配置と発達支援センター内の協力体制により、丁寧な支援につなげるようにしています。一人一人に寄り添った、よりきめ細やかな支援を行うために、さらなる人員確保と専門性向上に努めていきたいと思ひます。
適切な支援の提供	支援計画に対しては高い評価をいただきました。活動内容では、通所児以外の子どもとの活動の機会について、ほぼ全員が「いいえ」「わからない」の回答でした。	子どもたちの育ちを専門的に支援する場として、一人一人の課題を客観的に分析し、成長につなげる関わりや活動を行っています。年間計画に沿い、様々な工夫をしながら、行事や各領域に応じた活動をバランスよく取り入れるよう努めています。発達課題に応じたグループ活動では、定期的にメンバー構成を見直しながら、より一人一人の成長を促すようにしています。ただ昨年度同様、他拠点や地域との直接的な交流の機会を十分に作る事ができていません。感染対策とのバランスを取りながら、新しい視点で活動を生み出す努力を続けたいと思ひます。
保護者への説明責任等	保護者同士の連携や交流の機会について、十分ではないと感じられている方が半数を超える結果でした。コロナ禍で集うことの難しさがあるものの、やはり保護者同士やスタッフとの間で気軽に話すことのできる機会が求められています。保護者交流会や勉強会、クラス懇談、保護者参加行事などを企画しましたが、社会での感染状況により、オンライン実施や延期になったものもありました。オンライン行事では活発な交流になりにくい面があると感じます。	昨年度は実施できなかった保護者勉強会や、卒園児保護者をゲストとして招いた保護者交流会を、オンラインで実施しました。その他、昨年度好評だったオンライン参観も行いました。毎回参加率は高く、学び・交流の機会や日常の子どもたちの様子を知ることのできる機会に対するニーズを再認識しました。新型コロナウイルス感染症の感染状況が落ち着いている時には、直接集まってのクラス懇談や施設内でのお迎えを実施しましたが、やはり日常的に気軽に話をしたりつながったりする機会は十分ではありません。今後も工夫しながら交流の機会を作っていきたいと思ひます。
非常時等の対応	高い評価をいただきました。	避難訓練については実施後に報告することで、保護者の方に周知しました。
満足度	「いいえ」の回答はなく高い評価をいただきました。一方で、昨年度同様「どちらとも言えない」「わからない」の回答も少数見られます。日によってお子さんに行きしぶり等が見られると不安を感じられることと思ひます。加えて、ひよこ組では、子どもの成長を促す場として背中を押したり経験を広げたりする働きかけもあるため、必ずしも楽しい場面だけではないこと、本当に子ども自身も楽しいと思ひているのかわからないことも背景にあると感じます。	子どもたちにとって、様々な葛藤場面があっても、毎日安心して、笑顔で、楽しみに通える場になるよう、引き続き努力していきたいと思ひます。また、保護者の方とも、思いを共有しながら、子どもたち一人一人の成長を一緒に見守り、喜び合える関係を大切にしたいと思ひます。今後も様々な機会を通じて保護者の方のご意見を伺い、業務改善に努めていきます。